

蒲江浦 屋形島の開発史私考

— 佐伯藩営牧場の設置について —

坂本 義明

(会員 蒲江町蒲江浦)

一 はじめに

昭和三十四年の夏休みに、恩師大野保治先生と屋形島を訪れた。この頃の屋形島の海は透明度は高く、入江ではコバルトスズメが群泳し実に綺麗であった。ほのかな磯の香が心地よかった。

真つ黒に日焼けした少年が船つき場の堤防から飛び込みを披露した光景が印象に残っている。

蒲江小学校屋形島分校の先生のご好意で分校に宿泊している、島に住む広瀬栄氏が古文書を持参し、解読できないうちと言ったことでした。大野先生は憲法学が専門、私も駄目で、古文書をお預かりして帰り兼子先生に

解読していただいた。当時の新聞に内容が紹介されたと記憶している。

広瀬家の古文書によると、屋形島は佐伯藩の牧場となり馬が放牧された。島を訪ねて、お年寄りに伺ってみると現在でも馬を放牧した際の堀割が残っているという。馬を放牧する自然条件は、高原性の気候と広大な牧草地が考えられる。島は牧草に乏しく、傾斜地が多い。また、多雨で台風が襲来する。離島で馬の運搬も容易でないのに、なぜ島を牧場としたのか。牧場設置の背景にはどのような要因があるのだろうか。

島には、海の神である竜王が祀られている。竜神信仰にかかわるものかと予察した。

島の神社に通じる道端で漁網を繕う古老に伺ってみると「何かあるんじゃないやろなあ」という返事が返ってきただけであった。

小稿では、その意味するものを考えたい。

二 屋形島開発の歴史

(1) 赤木村(現在の直川村)百姓 四軒の移住
「屋形島関係史料集」によると、島が開発されたの

は、元禄七年(二六九四)であった。寛保三年(一七四三)五月、深島より屋形島へ移住したのは、百姓四軒(惣吉、忠左衛門、吉郎衛門、伝四郎)である。彼等は、享保六年(一七二二)に赤木村より深島へ移住していた。当時蒲江浦組からは深島移住を申し出る者は皆無の状態であった。

それで、深島に移住して開発に携わり渡世いたしき旨を言上していた赤木村の百姓を引き移らせることにしたという。百姓四軒の人数は一七人である。

寛保三年(一七四三)深島より屋形島へ移住することになった訳は、この年赤木村百姓、吉兵衛以下の所帯は多額の負債があり、人柄が悪く、わがままで居村において渡世なりがたく村方の妨げになるという理由で深島へ所替えになった。

このことによつて惣吉、忠左衛門、吉郎左衛門、伝四郎たちの便を図つて、屋形島に移住させることになる。現在の屋形島住民の祖先である。

それにしても惣吉、忠左衛門たちの二十数年に及ぶ深島の生活は想像を絶するものがあつたであらう。深島への移住は、天災の発生や年貢が重くのしかかつたことに

起因するのではないかと思うが、新天地への想いも抱いたことであらう。フロンティアスピリットの体現者たちではなからうか。

二八〇年前、彼等はどんな夢をこの島に実現しようとしたのだろうか。

「当浦日記」によると、

寛保五年(一七四五)には、屋形島の屋数も九軒となり、島の赤ベエから洲の鼻にかけて干拓も行なわれ、新田が造成された。宝暦五年(一七五五)には、冥加之米四斗を上納したいと島移百姓たちは願ひ出ている。

南海の孤島へ渡つて幾星霜、百姓をやるからには米



屋形島全景

をつくりたかつたらう。

(2) 土地開発と漁業

深島より屋形島へ移住した惣吉、忠左衛門たちは、宝

曆五年（一七五五）には、島の荒地を残らず打ち開く。惣吉は寛政六年（一七九四）六月、小引網壹帖（連上銀五百目）漁事つかまつりたいと願ひ出ている。

土地開発に関しては、地形上の限界もあり、畑地が大部分で、その地味はよくない。冥加之米上納を可能にしたのは漁業との關係を看過してはなるまい。

屋形島沿岸を北上する黒潮は季節ごとに豊富な魚類をもたらす。屈曲に富む海岸と変化の大きい瀬は魚の生息や繁殖に絶好となる。殊にイワシ類が多い。

蒲江湾一帯では、近世中期になると網漁が盛んになり網代をめぐる紛争も起っている。

三 牧場の設置について

屋形島は、蒲江浦の沖合二・五キロの南に位置する周囲五キロの小さな島である。豊後水道に臨む南側から東



網を保管する納屋

側にかけて険しい海食崖がみられる。すさまじい波浪の営力が作用していることがわかる。北側は砂れきの海岸となつている。島の西部は潮流が砂れきを運び小規模ながら砂洲が形成されている。集落は東側の山裾の風波をさける地所にある。この集落の周辺と島の北側の浜方の奥に畑地がある。現在は大部分が荒地となつている。

屋形島は享保五年（一七二〇）に御立山となり同九年（一七二四）に佐伯藩六代藩主、高慶によつて牧場が設置される。牧場の保護取締りに関しては、かなりきつい達



屋形島の畑地

しが村役人に出されている。すなわち、馬一〇匹を放したので蒲江浦組庄屋、肝煎、諸百姓にいたるまで油断なく注意すべし。回船の輩で猥らなことをする者がいたら急度注進すべし。屋形島の立木はいうまでもなく草な

ど一切伐取つてはならない。犬は放してはならない。

覚

一 当嶋之義牧場被仰付此節馬拾疋ノ者奈し候間蒲江浦庄屋肝煎諸百姓無油断心ヲ付乍然回船ノ輩猥成ノ義い多し候ハ、急度可致注進候漁船ノノ者共義若及見聞候義ヲ隱置後日ニ相ノ聞へ候ハ、可為越度候事

一 右之通二候へ者当嶋ノ立木者不及云ニノ草一切伐取申間敷候事

一 当嶋へ参り候ハ、以後犬者奈し申間敷ノ候事

右之趣相背輩於有之者急度可及吟味者也

享保九辰年七月

馬と人とのつながりは古い。儀式に、軍事に、農耕にあるいは運輸にと。

武士にとって「文武弓馬」は最も大事な道である。幕府や大名はこぞって馬術を奨励した。幕藩体制が確立し国内の軍事的争乱がなくなっても武士にとっては、馬は権威の象徴である。名馬が求められるわけである。

屋形島に牧場を設置した六代藩主高慶は、若き日に將軍綱吉の側近に仕えた。学問を好み儀式典礼を尊ぶ。藩

主となった高慶は藩中に布告した条目の第一に弓馬劍槍の技に習熟することをあげた。また、神仏を尊崇し、正徳元年（一七一二）八大竜王の廟を佐伯湾内の八島に建立する。信仰心が厚いことから、蒲江浦の王子権現及び葉師如来にも参詣している。

屋形島に放牧された馬は、三頭が駒で一頭は駄馬の記録があるが残りは不明である。おそらく駒がほとんどであらう。

鳥に牧場を設置した理由は、藩財政の窮乏から正徳二年（一七一二）には、藩士の俸禄カットを実施する。その

浦々の馬数 (享保5年)

	頭数	備考
浦江浦	3	駒(1)・駄馬(1)
河内浦	7	駄馬(7)
坪浦	4	駄馬(4)
野々河内浦	12	駄馬(12)
森崎浦	21	駄馬(21)
丸市尾浦	20	駄馬(20)
葛原浦	16	駄馬(16)
波当津浦	21	駒(3)・駄馬(18)
計	104	

代り知行高一五〇石未滿の藩士に關しては軍馬の所持を免除したので、藩がまとめて軍馬を管理しなければならなくなった。鳥は馬の管理が容易であるという物理的な条件も考え

られるが、島では犬を放してはならないという達しは何を意味するのか。

海には、不思議な力を持つ竜神がいて、時には化身した竜の媒介によつて名馬が生まれるという伝説があるのかも知れない。仮説を検証すべく竜神伝説、中国・日本の神話伝説、民間伝承について調べたが駄目であった。ところが別府大学歴史研究部編の「歴史の海」九号に屋形島の民間伝承の調査が報告されており、その中に、アシカ(しま馬)という動物が海にいて、時々陸にあがつて来て馬と交尾をすると名馬ができる。

この民間伝承は、竜神伝説に通じるものではなからうか。竜神信仰が島に牧場を設置するきっかけになったのではあるまいか。

犬の鋭い嗅覚、聴覚、激しい攻撃性は竜の上陸のさまたげになると考えたのかも知れない。

四 おわりに

冬季の蒲江湾一帯の一本釣りは、イカ・鰯が主となる。北西の季節風が卓越するので出漁も限定される。一月下旬のある日、空模様から判断して寒風と思ひ込み、

イカ釣りに出かけたが風波が激しくなり釣りは断念して屋形島に上陸した。集落に足を踏み入れた瞬間犬に吠えられ驚いた。

藩政時代に、犬を放すなという藩主の達しの意味することを考えながら集落の周辺を一巡した。小高い藪の中で庚申塔四基を発見した。塔にまきついたカズラを取り払うと彩色の痕跡があり、宝暦年間の建立であることが読みとれた。牧場の設置に関しては、開発史の叙述に多くをさいてしまった。民間伝承には、日本人の暮しの原点を示す要素がふんだんに包含されていると思う。これを如何に問いつめていくかが課題である。浅学非才のせいもあり不十分な考究に終始してしまった。皆様のご批評を賜りたい。

【参考文献】

- ・佐藤 正博編「屋形島関係史料集」
- ・佐伯市史編さん委員会編「佐伯市史」
- ・佐藤 照雄編「社会科学のための民俗学」
- ・別府大学歴史研究部編「歴史の海」
- ・大分県総務部編「大分県史 近世篇(1)」他